

「若い者に一任」先代一斉引退

前回は創業以来、紆余曲折を経ながらも現在に至った八木澤商店の歩みを概観した。今回から同社が事業継承をどう進めてきたかの本論に入ることとする。

地元・陸前高田（岩手県）の河野家に残る古文書には、1807（文化4）年の清酒造り株の取得の経緯を記したものが残っており、八木澤商店の創業時を知ることができる。途中、戦時企業整備令により酒造業こそ中止したが、しょうゆ、みその製造販売を続け、創業から202年を経た現在まで、一貫して「醸造」を生業としている。

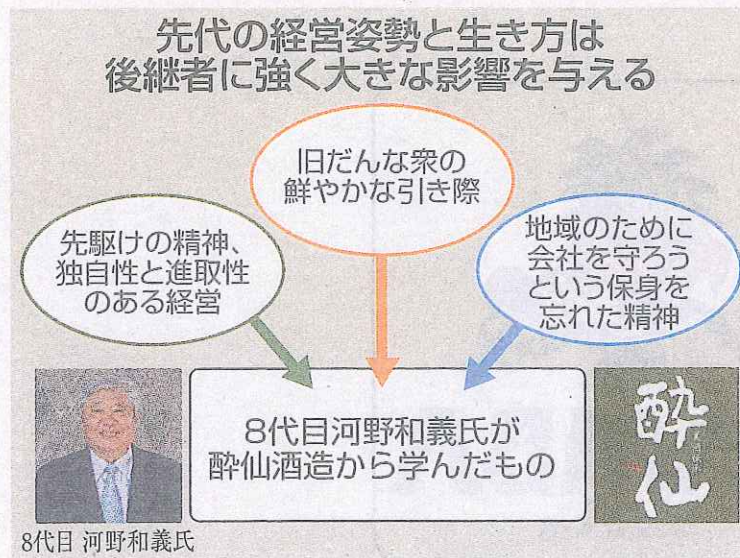
第二次世界大戦まで、陸前高田には8軒の造り酒屋があったが、前述の整備令で合併させられることになった。この8軒が「酔仙酒造」という一つの酒造会社に生まれ変わり、現在も続いている。八木澤商店の7代目社長、河野通義氏はこの酔仙酒

造の中心メンバーとして、八木澤商店の経営のかじ取りをしながら、酔仙酒造の専務を務め、後に会長となる。

酔仙酒造には「先駆けの精神」があった。にごり酒も純米酒も日本で初めて商品化。成田空港免税店に初めて焼酎を置いたのも同社である。また「安売りしない会社」として業界で有名であり、独自性と進取を重んじる企業風土だった。

酔仙酒造を立ち上げた当時の経営陣の結束力の強固さには相当なものがあったという。一つは後進を思う気持ちにおける結束力。1944年に合併した際、旧体制が残っているのはやりたくないだろうと、旧だんな衆が示し合わせて、全員一斉に引退を表明した。「すべて若いものに任せる」というわけだ。先代が居座り続け「老害」と陰口をたたかれる経営者が多い中、実に潔い決断といえるだろう。

事業継承の極意



もう一つは、地域を守ろうという結束力である。戦中の米不足の状況下、何とか生産を続けたいという熱意から闇米を買わざるを得なくなった。しかし、それも警察に摘発されて、当時

いまの・せいいち 日本リクルートセンター（現リクルート）、リクルートコスモス（現コスモスイニシア）を経て1998年組織人事コンサルティング会社「マングローブ」設立。著書に『マングローブが教えてくれた働き方』（P-VineBOOKs）。

マングローブ 代表取締役社長 今野誠一

それは「すべて自分の独断でやったことで他の3人は何も知らない。だから釈放してほしい」。それを聞いた取調官はすっかり感服してしまったという。

自分1人が逮捕されても残りの3人が帰れば会社は運営できる。地域のために、会社をつぶすことだけはあってはならないという見事な結束力の証しだったのだ。

4人の中で最後まで留置場で頑張ったのはどうやら河野通義氏であったようだ。8代目、河野和義氏はそんな父親たちの数々の逸話を聞きながら育ったのである。この酔仙酒造への合併によって、八木澤商店は大正元年ごろから酒造と並行して行っていたみそ、しょうゆの製造販売に特化していくことになる。

の経営メンバーだった河野通義氏を含む4人が逮捕され、別々の部屋で取り調べを受けることとなった。

その取り調べに対して、全員が同じことを話したという。そ